

第一章 死とは何か

13

生命誕生から

三十六億年間の生と死のリレー

死への意識を持った日

父母の死

生きている人間は

すでに死を経験している

世代によって異なる

死に対する感覚

死と自分を同一化すれば、

死は怖くない

「メント・モリ」を超えて

第二章 死の向こう側

43

無意識は死の世界を感じている

人が輪廻転生する理由

ダンテが描く地獄、煉獄、天国

魂が定めた運命に従う

魂を物質的に捉えると

「死後生」があるとわかれば、

おかしくなる

自殺できない

三島由紀夫が説いた霊性と霊格

死後の世界が「実」、

瀬戸内寂聴さんは、

現世は「虚」

「死んだ後」を恐れた

死んだ猫との会話

輪廻転生は駅伝競走に似ている

第二章 死後を生きる

101

優れた芸術作品には

死のメタファーが潜んでいる

死の世界はコンセプチュアルではない

絵を描くことで

死のシミュレーションをしている

人は二つの時間を生きている

アートが見せる未来の現実

悪夢の効用

宇宙のすべての記憶にアクセスする

現実をコントロールしないで生きる

A-1は究極の反自然主義

空っぽの世界

「自分は何者でもない」と言う

アンディ・ウォーホル

人の本音に透けて見える「魂」

脳は嘘をつくが、

魂は嘘をつかない

なぜ、僕は死後の世界の

存在を認めるのか

死から生を眺める技術

第四章 死への準備

169

目と鼻の先にある死

人生は「未完成」でいい

「年相応」でなく、曖昧に生きる

老年から始まる自由

「終活」なんてどうでもいい

ハンディキャップが生み出す可能性

運命に従って生きれば、

忘れることで輪廻する

そう間違えない

おわりに

203

はじめに

編集部から死に関するエッセイを依頼された。生きている以上、死はついて回るが、死は頭で考えるものなのか身体で感じ取るものなのか、どちらだ。そこまで突きつめて考えたことがなかったが、編集部から、質問が矢継ぎばやに来るので、逃げられないというか、追いつめられたような感じになるのだった。

何でもいいから、思いついたことから死を語ることにした。死についてはたぶん我流の死論になるというか、死の独学である。すでに哲学者や宗教家や文学者が語りつくしたことを、さも、たった今、発見したかのように語っている自分がいることを恥じもしないで……。ああ恥ずかしい。

死を語ることは結局自分を語ることになる。死を肉体的なものとするか、精神的なものとするか、人それぞれだが、どうも肉体的でも精神的でもなく、霊的なものではないかと思えてきた。そんなことを考察できるかどうか、これも自信がないが。